網走桂陽高校　図書だより　2021/03/15 発行　　文責：川口修平

ほんよも No.011

小説は色々な人生を体験できます。

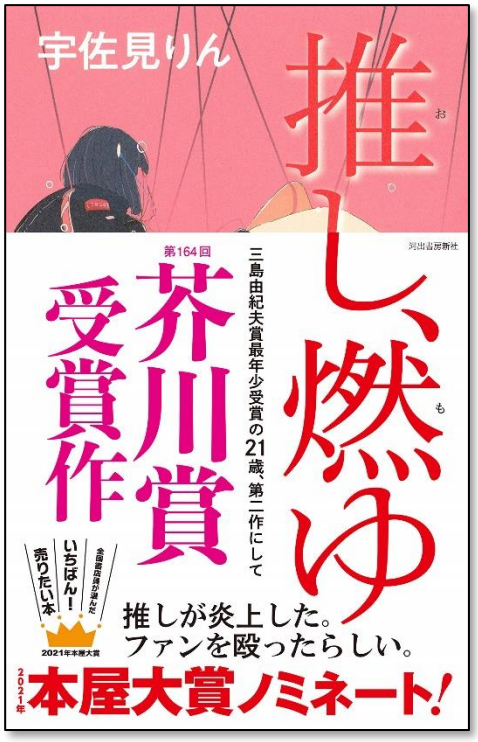
先日、Twitter 上にこんな文章を見つけました。

> 高校生の時に通っていた塾の先生が言っていた
> 「自分の人生は1通りしかないけど、小説を100冊読めば100通りの人生を擬似体験出来るんだよ」
> という言葉がずっと心に残っていて、今でも小説を愛している理由のひとつ。
>
> 21:31 · 2021/02/25 · Twitter for iPhone

　これは全くその通りです。小説を読むことで、どんな人生でも疑似体験することができるのです。ぜひ図書室に来て、体験してみたい人生を選んでください。私は右で紹介する本を読んで、「アイドルを推す人生」を疑似体験しました。

～「推しを推す人たち」を解釈する～
『推し、燃ゆ』（宇佐美りん）

内容・あらすじ



16 歳の山下あかりは、アイドルグループ「まざま座」のメンバーとして活躍している上野真幸を推しています。

推しが発言する言葉は全て書き取り、ファイルに綴じる。CD・DVD・写真集は保存用と観賞用と貸出用として常に 3 つ買う。放送された番組は録画して何度も見返す……。

これらは全て推しを「解釈」するための行為で、あかりは解釈したものをブログに書き残します。

その推しがある日突然、「ファンを殴った」ということで炎上します。推しを解釈してきたあかりにとってはあり得ない事態でした――。

川口先生の感想

ここ最近、「推し」や「自担」という単語を耳にする機会が多くなっていて、「何となく意味はわかるけど深くは知らない」という私にとってはとても勉強になった小説でした。「推しを推す」ということがよくわかりました。「おお、これが祭壇というやつか」などと感心していました。

主人公・あかり目線の一人称小説で、推しを推す人の心理が克明に描写されています。内面の掘り下げ具合がすごい。あかりはこう語ります。

> あたしには、みんなが難なくこなせる何気ない生活もままならなくて、その皺寄せにぐちゃぐちゃ苦しんでばかりいる。だけど推しを推すことがあたしの生活の中心で絶対で、それだけは何をおいても 明確だった。中心っていうか、背骨かな。

依存でも逃避でもなく、「背骨」。この表現に共感できる人はぜひ読んでみてください。作者の宇佐美りんさんは弱冠 21 歳。若い感性に溢れる小説でした。